

神・仏と三つの川と人々が出会うまち 健幸・観幸・子どももの未来が輝くまち

量から質への転換による 健幸まちづくり

京都府の南西端に位置し、京都市、大阪市という二大都市の中間にある八幡市は、一昨年、市制施行40周年の節目を迎えた。

日本三大八幡宮の一つに数えられる石清水八幡宮（創建・西暦860年、本社10棟および附棟札3枚が国宝指定）にちなんだ由緒ある市名を持つ八幡市は、木津川・宇治川・桂川が合流し、大河・淀川となる地点に開けたまちだ。古来、水路と陸路（古山陽道・東高野街道・京街道など）を併せた交通の要衝として、京都・奈良・大阪・瀬戸内地方を結ぶ結節点の役割を果たしてきた。

現在でも、八幡市は交通の利便性が高いまちとして知られる。京都と大阪をつなぐ京阪本線（八幡市駅・橋本駅）のほか、新名神高速道路、国道1号線、第二京阪道路、京滋バイ

パスなどの幹線道路が市域を縦横に通り、大阪市・京都市の通勤圏にある絶好のベッドタウンとしての発展が、1970年代から1990年代にかけて、八幡市の人口を急増させる要因となった。

市制施行の7年前、大阪万博が開催された昭和45年に2万人弱だった八幡市の人口は、石清水八幡宮周辺で行われた《男山団地》の開発を契機に、全国屈指の増加率を示し始める。そして平成5年の7万6174人をピークに横ばいから漸減期に入り、今年2月末現在は7万1342人となっている。人口全体の減少率は緩やかだが、出生数の減少と社会減が、共に微減ながら進みつつあるというのが現状だ。

さらに1970年代以降、八幡市の人口急増の推進力となり、現在でも全人口の約3割が生活する《男山団地》では、初期入居者の高齢化が全体的に進んでいる。付随して八幡市の高齢化率も高まり、現在の高齢化率は約30%

ほりぐちふみあき
堀口文昭
八幡市長



となっている。

しかし、前述し

たように、八幡市が京阪エ

リアにおける有数の交通結節点である

事実には変わりがない。さらに新名神高速

道路も2023年度には全通の予定で、新

東名・新名神高速道路は現在、各地で続々

と部分開通し、つながり始めている。全通

すれば、八幡市は東京・名古屋・大阪・神

戸の四大都市を結ぶ、新たな大動脈の沿線

に組み込まれることになる。当然、その「全



国宝指定もされている八幡市の象徴・石清水八幡宮(本社)

通後のまちづくり」いかにによっては、八幡市の人口減少の抑制も期待できるだろう。「新名神高速道路の全通後に向けたまちづくりについては、八幡京田辺JCT・ICが一昨年4月に新設されたことで、今後、より多角的な開発の機運が高まっていくものと期待されます(※注Ⅱ八幡京田辺JCT・IC/新名神高速道路と第二京阪道路、京奈和自動車道が接続するジャンクション・インターチェンジ)。



八幡市駅から男山山上の石清水八幡宮に至る男山ケーブル

そのため商業・産業・流通施設などの集積を図る土地の利用計画について、市民のご意見の収集を含め、現在、関係各方面との調整を重ねているところです。またそれを推進するに当たっては、従来の人口増に立脚して進めてきた「生活都市」、いわゆるベッドタウンとしてのまちづくり、およびそうしたイメージからも脱却し、人口減少時代を背景に、市内に仕事の場や暮らしを楽しめる場もある、より多機能な力を有したまちへの転換、すなわち量から質への転換をいかに図っていくか。それが最も重要なポイントと考えています。そう語る堀口文昭八幡市長は、さらに「今年が市長2期目の総仕上げの年になります。大阪府北部地震や相次ぐ台風被害などの自然災害対策や防災拠点としての機能も有した新庁舎の整備などを軸にした安心・安全なまち



第5次総合計画の将来都市像《スマートウェルネスシティ、スマートウェルカミングシティ》とは、一体どのようなまちを目指す

スマートウェルネスシティは 健康なまち

づくりとともに、市政運営全体においても、この量から質への転換を果たしていきたい。それによって、住んでよし、訪れてよしの八幡市づくりの基盤形成を追求していきたい」と力を込める。

こうしたまちづくりの全体的な方向性は、平成30年3月に策定されたばかりの「第5次八幡市総合計画」に表れているが、「量から質への転換」はすなわち、第5次総合計画の将来都市像である《スマートウェルネスシティ、スマートウェルカミングシティ》の実現にもダイレクトにつながってくるものといえる。



地域住民との協働で図られるニュータウン(団地)の活性化

ということなのだろうか。

「ご承知のように現在の全国の自治体に共通する課題として、人口減少・人口構造の変化などがもたらす生産年齢人口の減少と、それに付随する市税の減収という問題がまずあります。加えて高齢化とともに進む社会保障費の増大化への対処という問題もある。これらはいわば不可避の課題であるわけですが、だからといって未来に向けた投資を怠れば、都市としての発展は止まってしまいます。

ここで必要なのが発想の転換です。特に1970年代から右肩上がり人口を増やし続けてきた本市にとって、人口増が当たり前という『量』に依存する体制から、今あるもの

をいかに大切にし、いろいろな意味での『質』を追求する施策へと発想の転換を果たしていくのか？ そのためには人口減少社会・超高齢社会をマイナスイメージでばかりとらえず、そういう時代だからこそ実現できること、あるいは実現すべきことに目を向けることが大切なのだと考えます。

平成30年3月に策定した『やわたスマートウェルネスシティ計画』こそは、まさにその根幹になり得る施策と自負しています。端的に言えば、医療費や介護費の増大などに立ち向かうには、その増大を抑制するための『人に対する健康づくり』がまず大切になります。同時に高齢者も自然にまちを歩きたくなるような都市的環境整備を行う必要がある。私たちはそれを『まちの健康づくり』と表現しています。この『人とまちの双方の健康づくり』こそが、スマートウェルネスシティの根幹で、そういうまちには自然と外からも人々が訪れてくるでしょう。ひいては交流人口の増加、定住人口の増加にもつながってくる可能性があります(堀口市長)

スマートウェルネスシティはご承知のように、超高齢・人口減少社会に生じるさまざまな課題を、自治体自らの努力と連携で克服するための都市モデルを構築しようとする理念で、平成21年には志を同じくする首長たちによる「スマートウェルネスシティ首長研究会」が発足。本年3月現在では、八幡市を含め37都道府県の79区市町が参加している。



長さ356mと日本最長級の木橋「上津屋橋」と浜茶の茶園



放生会で知られる放生川の太鼓橋(安居橋)



高齢者の積極的な姿勢が支えるウェルネスシティ・八幡市

同研究会ではスマートウェルネスシティを「健幸(けんこう)のまちづくり」とも表現しており、八幡市では「人とまちの双方の健康づくり」を目指すまちづくりを「健幸のまちづくり」の基盤にしている。そして「運動習慣があり、良い食習慣を実行し、現在の生活に満足している住民」を「健やかで幸せに暮らしている市民」と定義。《やわたスマートウェルネスシティ計画》の策定から10年後の2027年度には、全市民の半分以上が、そのような「健やかで幸せに暮らしている市民」(計画策定時の住民調査では21・3%)となるよう、各種の施策を進めていくとしている。具体的な施策としては、例えば次のような取り組みが始まっている(平成30年度実績)。

◇施策①「やわた健幸づくり推進連携協定の締結」市内・近郊のスポーツクラブ5社と連携協定を締結。行政とスポーツクラブ相互の情報発信や健康づくり教室、イベントなどの実施を図る。

◇施策②「健幸マルシェの開催」八幡市では国民健康保険や介護のデータを一元化し、各小中学校における健幸状態を分析する健幸クラウドシステムを導入。中でも運動器疾患・生活習慣病関連の医療費の伸び率が高い小学校区を対象に、啓発活動や健幸づくりイベントを開催。

◇施策③「やわた未来いきいき健幸プロジェクトの推進」八幡市では平成26年度から取り組んできた健康マイレージ事業を進展させ、八幡市を含む全国5団体による魅力あるインセンティブを備えたポイント事業の実施に取り組んでいる。

観幸のまちづくりと八幡ストーリー

「人とまちの双方の健康づくり」を図る「健幸のまちづくり」は、「住んでよし」のまちづくりであると同時に、前述したように「訪れてよし」のまちづくりでもある。

「人の健幸づくりが市民の健康意識を高めるための取り組みであるとすれば、まちの健幸づくりでは、八幡市の自然や歴史文化を生かした『歩きたくなるまち』の実現を図っていきます(堀口市長)」



三川合流の地点(背割堤)は桜の名所

八幡市には石清水八幡宮をはじめとする文化資源や周辺の自然景観、さらには木津川・宇治川・桂川や三川が合流した淀川を中心に広がる豊かな自然環境が備わっている。それらを活用した散策ルートは従来からあったが、今後はそのネットワーク化や整備を図るとともに、健幸のまちづくりに加えて観幸(かんこう)のまちづくり(観光に訪れた人々も幸せを感じられるようなまちづくり)にも資するような各種の環境整備を実施する予定だ。

「八幡市は面積が24㎢強と、かなりコンパクトなまちです。その中に3本の大きな川、さらにそれらが合流した淀川や放生会(ほうせいご)の故事で知られる放生川などの支流があります。まちの中心である京阪本線・八幡市駅の駅前に



国の名勝・松花堂庭園

は、石清水八幡宮が鎮座する男山がそびえています。また松花堂弁当のルートとして知られる松花堂昭乗（しょうかどうしょうじょうじょう）（1582年～1639年）などにまつわる主要な歴史的遺構も、コンパクトな市域の中心部に集まっています。散策ルートの宝庫ともいえる土地柄で、車に頼らなくても快適便利に暮らせる条件がそろっています。

交通の要衝として、大阪市とも京都市とも直接につながる通勤圏・通学圏を形成しており、それぞれのライフステージやライフスタイルに応じた市民生活、多様な住まい方のできるまちです。まさに、いつまでも住んでいたいと思えるまちの条件がそろっている。



全国の老若男女が応募する「徒然草エッセイ大賞」(授賞式)

これまでは、その素晴らしさに慣れてしまっただけで、外に発信するということが発想が薄かった。そんな反省から生まれたのが、ウェブで八幡市の魅力を全国発信する《八幡ストーリー》です（堀口市長）

《八幡ストーリー》では「神と仏、三つの川、人と人が出会うまち」のキャッチフレーズの下、「①はちまんさん」「②門前町」「③茶文化」「④松花堂弁当」「⑤三つの川」の五つの角度から八幡市を紹介するストーリーが展開されて

おり、それらの見どころを自分の足で回る観光モデルルートがいくつも紹介されている。

これらのストーリーには石清水八幡宮を起点に、三つの川の出会いとそれにより生まれる淀川、このまちで修業し、歴史に名を成した松花堂昭乗、茶の生産地として京文化全般にも常に影響をもたらした八幡の茶文化、世界初の電球のフィラメントに八幡産の竹を使用したことで生まれた発明王・エジソンとの奇跡的ともいえる接点など、八幡市を巡る実に多彩な歴史やエピソードが盛り込まれている。

八幡ストーリー②「門前町」に登場し、市制施行40周年の記念事業として平成29年度から始まった「徒然草エッセイ大賞」の生みの親ともいえる、あの『徒然草』の作者・吉田兼好（1283年ごろ～1352年ごろ）と八幡市の時空を超えた接点もまた、石清水八幡宮を媒介として生まれた。

一度は訪れるべき 石清水八幡宮のまち

接点は、古典の教科書などでも有名な『徒然草』第52段にある。京都・仁和寺の法師が生涯に一度は石清水八幡宮をお参りしたいと訪れるも、本殿が男山の山上にあるのを知らず、麓の寺や神社を間違ってお参りしたというエピソードが描かれている。京都の裏鬼門を守護する寺社の代表であり、歴代天皇が参



15年間続いている「子ども会議」

拝するなど、表鬼門を守護する比叡山延暦寺^{えんりやじ}とともに歴史的に重要な役割を果たしてきた石清水八幡宮は、実際、中世・近世の人々などからは「生涯に一度は訪れるべき神聖の地」と認識されていたことを『徒然草』第52段は物語っている。「徒然草エッセイ大賞」はそんな縁から生まれた八幡市の新たな発信コンテンツだが、初回・2回目とも2千通を超える応募があるなど、エッセイ・コンテストとしても異例の人気だ。

「それは『徒然草』や吉田兼好のネームバリューのおかげでもあるでしょうが、同時に

『徒然草』に石清水八幡宮が登場するという事実が全国的に知られていることの証し」(堀口市長)ともいえるだろう。

八幡市が展開する「量から質への転換」を基盤とするまちづくりにおいて、もう一つ、今後大きな意味を持つてくるのではないかとと思われる施策に「八幡市子ども会議」がある。八幡市子ども会議は子どもたちが自ら、いじめ問題をはじめとする自分たちを取り巻くさまざまな課題や、地域の課題、地域の将来などについて議論し、その結論を市に提言していくことを目的に、平成16年度から始まった。提言は毎年12月に実施されており、昨年12月には第15回の「八幡市子ども会議—市長への提言—」が行われた。

「子ども会議では毎年、市内の全小・中学校と府立京都八幡高等学校の児童・生徒たちに委員(昨年度は32名)を委嘱し、約半年間にわたってさまざまなテーマで議論していただいております。八幡市にはさらにもう一つ、子育て中の親御さんたちに委嘱し、子育て関連のテーマだけでなく地域課題などについても多角的な意見を寄せていただく『子ども・子育て会議』を定期的に実施しています」(堀口市長)

何事につけ「量から質への転換」を旨とする市政運営を進めようとしている八幡市にとって、自治組織などで中心的役割を果たす中高年・老年層の市民だけでなく、こうした子どもたち、子育て中の働き盛り世代の意見をも

常時吸収できる環境が整っていることは、将来的に大きなアドバンテージになるのではないだろうか。

八幡市ではまた、スマホ対応の母子健康手帳アプリを導入、「保護者の利便性向上、妊娠から育児期における支援ツール」として提供している。こうした臨機応変の子育て支援も、子育て世代の市民の意見などから常にニーズを把握しているからこそそのたまものといえるだろう。

三つの川が合流し大河が生まれる地点に開けた八幡市の未来は、こうして子どもたちや働き盛り(子育て)世代、中高年・老年世代の知恵や地域愛の合流により、量から質への流れの大河へこぎ出そうとしている。

(取材・文：遠藤隆／取材日平成31年2月21日)



日本の飛行原理の先駆者・二宮忠八が航空事故犠牲者鎮魂のため1915年に創建した飛行神社